

在籍保育園における親子療育教室の有用性：
育児支援の視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 恵子, 森尾, 恵里, 瀧波, 洋子, 長谷川, 清美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/9929

在籍保育園における親子療育教室の有用性 — 育児支援の視点から —

福井大学教育地域科学部 竹内 恵子
福井市福祉保健部子育て支援室 森尾 恵里
同 瀧波 洋子
同 長谷川 清美
京都学園大学健康医療学部 橋本 かほる
福井県子ども療育センター 津田 明美

発達気になる子どもとその保護者を対象とした親子療育教室を、子どもが在籍する園で2012～2014年度開催した。6～9月の土曜日、毎年10回1クール開催し、3年間でのべ28組の親子が参加した。毎回のプログラムは、園長、主任保育士、担任を中心とする複数の当該保育園保育士が中心となり企画運営した。各年度10回の教室終了後、参加した保護者を対象に、教室の内容や保護者自身の変化、育児への影響等についてアンケートを実施した。3年間のアンケート結果から、在籍保育園における親子療育教室が保護者の育児支援の場として有用であることがあきらかとなった。

キーワード：親子教室、保育園、発達障がい、保育士、保護者

1. 研究背景

(1) 発達気になる子どもと保護者への援助体制

乳幼児期において、発達気になる子ども、保護者が育てにくいと感じている子どもに対して、相談会や定期的な保護者への助言、個別の療育等さまざまな援助が自治体や専門機関で行われている。そのひとつに小グループで親子と一緒にプログラムに参加する「親子教室」という形態での支援方法がある。子どもの発達を促すとともに、親子関係の強化や保護者への育児支援の場として、その有用性について多くの報告がある^{1)~3)}。

一方でこれらの教室は、開催場所が遠方であったり、開催日が平日である等により、家庭によっては利用できない場合もある。また、わが子の発達や育児に不安を抱えつつも、保健センターや療育機関等へ通所・受診するまでの気持ちが持てないという場合もある。

親子関係の構築が重要な乳幼児期に、保護者への育児支援が十分なされないことは、その後の保護者の子どもへのかかわり方や育児のモチベーションに大きく影響を及ぼす。適切な時期に適切な育児支援を保護者が受けられる環境が必要である。

(2) 保育所保育指針における子育て支援機能の強化

おりしも平成20年告示の「保育所保育指針⁴⁾」において、保育所における質の高い保育と子育て支援機能の強化が求められた。そして「保育所保育指針等の施行等について⁵⁾」では、地方の実情をふまえた「地方公共団体版アクションプログラム」を策定することが望ましいと

された。

これをうけて福井市では、各保育園の地域性や保育方針等を考慮した園独自のアクションプログラム⁶⁾を策定することとした。

福井市立A保育園は、福井市立保育園28園のなかでも定員160名の大規模園である⁷⁾。近隣に県立子ども療育センター、民間の療育機関、県立特別支援教育センター等の専門機関があり、それらの機関を利用する家庭があると同時に、園としてこれら諸機関との連携もとりやすい状況にある。

(1)(2)の背景から、福井市では「子どもが在籍している地域の保育園」で保護者の勤務調整のしやすい土曜日に、親子ともに慣れている「保育園の保育士」による親子教室を2012年から3年間実施し、その有用性を検討することとなった。

今回、3年間が終了した時点で、各年度の親子教室終了後に実施した保護者アンケートから、育児支援としての教室の有用性について検討した。

「発達気になる子ども」は漠然とした表現であるが、本研究においては、基礎疾患や発達障害等の診断の有無にかかわらず、保育園において保育士の視点で発達が気になる子どもや保護者が育てにくいと感じている子どもとする。

また本研究における「親子療育教室（以下、親子教室、

⁴⁾ 2015年4月1日現在

教室)」とは、このような子どもが保護者と一緒に参加する教室のことである。子どもの発達支援、保護者の子ども理解や育児を支援する目的で、療育機関や自治体の乳幼児健診事後教室等で行われている親子教室と同様の形態である。

2. 親子療育教室の概要

対象としたのは、言語発達の遅れ、落ち着きのなさ、やりとりが一方的、場面きりかえが苦手等がある子どもである。発達障がい等の診断がついていたり、療育機関にすでに通所している子どもは基本的に対象外とした。

前年度末に教室の対象となりうる子どもの保護者を個別に誘い、各年度9～10組の親子が参加した。

教室は各年度6～9月に、毎週～隔週間隔で10回を1クールとして開催した。毎回のプログラムは表1のとおりである。

登園から10：30までは親子と一緒に活動する。学習会は、スタッフから当日のプログラムの目的や子どもの様子を解説し、その後ミニ講義と意見交換を行った。

表1 親子療育教室のプログラム

《場所》	福井市立A保育園 ホール・保育室
《日時》	土曜日午前中 全10回
《プログラム》	
9：30	登園、自由遊び、体操
9：45	集合、出欠、パネルシアターや紙芝居
10：00	親子遊び、運動遊び、ルール遊び
10：30	おやつ（保護者は別室で学習会）
11：00	挨拶、降園

スタッフは、子どもの担任保育士を含むA保育園保育士数名、園外の専門職スタッフとして、保育カウンセラー（言語聴覚士）、大学教員（小児科医）、福井市子育て支援室の保育専門官および保健師が関与した。具体的なプログラム（遊びの内容）は、ふだんの子どもの様子がわかっている保育士が作成し、スタッフミーティングで専門職とともに毎回検討した。

学習会は、発達や育児に関する講義を、保育士、保育カウンセラー、保健師、栄養士、小児科医等が担当した。以下に例として2013年度の学習会テーマを示す。

回	テーマ	担当者
1	親子療育教室とは	保育カウンセラー
2	今楽しんでいる遊び	保育士
3	手先の話（園での様子）	保育士
4	生活リズムについて	保健師
5	情報交換会（前年度教室参加者との交流）	
6	食事のこと	保育士
7	遊びや生活を見直す	小児科医
8	食事の話、心の成長	栄養士、保育専門官
9	言葉の発達	保育カウンセラー
10	まとめ	スタッフ全員

教室に参加した親子は3年間でのべ28組である。内訳は以下のとおりである。

年度		子どもの所属クラス
2012	10組	2歳児5名、3歳児3名、4歳児2名
2013	9組	1歳児2名、2歳児6名、3歳児1名
2014	9組	1歳児1名、2歳児3名、3歳児5名

日程や子どもの体調等により全員がそろわない回もあったが各年度とも途中で離脱した親子はなかった。

参加保護者は母親が中心であったが、父親の参加、両親そろって参加された家庭もあった。

3. 調査方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、2012～2014年度、親子療育教室に参加した子どもの保護者28名である。

なお2014度の2歳児1名、3歳児4名は前年度からの継続参加だが、アンケートには毎年回答しているため調査対象人数はのべ28名である。

(2) 調査時期および方法

回収率は100%で、回答者はすべて母親である。

各年度10回の教室終了後、約2ヶ月後にアンケート用紙を配布、後日提出とした。

本研究は、親子療育教室に参加する際に研究報告に使用することを説明し、書面により同意を得ている。

(3) 調査項目

教室の実施形態や内容、スタッフの援助方法、保護者自身の変化、育児への影響等20項目である。

4. 結果と考察

(1) 教室の実施形態について

10回の開催回数については、21名が「適切だった」、6名が「少なかった」を選択し、「多かった」を選択した保護者はいなかった（図1）。

教室は毎週～隔週で開催したが、この間隔については、23名が「適切だった」、2名が「毎週がよい」、3名が「その他」を選択した。「その他」では「お盆は避けた方がよい」「夏は行事が多いのであけたほうがよい」「土曜日に予定が入り参加できないことがあった」と記載されていた。

開催回数および開催間隔は、保護者の参加意欲、保護者の子ども理解のために必要と考えるプログラムの実施、保育園の行事や保育士の勤務体制等、様々な条件を考慮して決めたものであるが、概ね保護者からは賛同を得た。

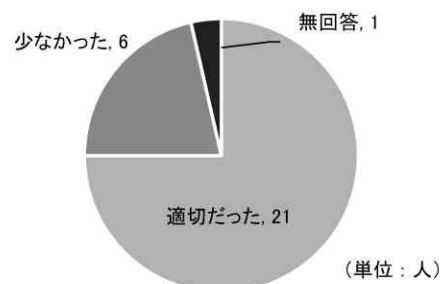


図1 開催回数(10回)

(2) 教室への誘い方について

前年度末に、園長、主任保育士が対象となる子どもの保護者を教室に誘う。その際の誘い方については、24名が「適切だった」、2名が「なぜ誘われたのかわからなかった」、2名が「その他」を選択したが、1名は「教室の主旨がわからなかった」と記述、1名は保護者から教室参加を申し出た方であった（図2）。

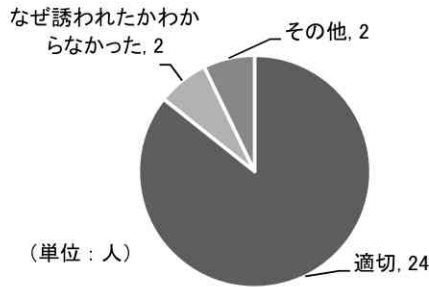


図2 教室への誘い方

「なぜ誘われたのかわからなかった」「教室の主旨がわからなかった」と記載された3名は、いずれも初年度参加の保護者である。初年度はスタッフ側が教室の具体的なイメージがまだつかめない状況での誘いだったこともあり、説明が十分でなかった可能性がある。翌年度は、前年度の教室の様子を写真や資料を使ってより具体的に提示して紹介するなどの工夫をすることで全員が「適切」という評価となった。

(3) 教室の内容について

(3)-1 活動中のスタッフの声かけやアドバイス

活動中のスタッフの声かけやアドバイスは、26名が「適切だった」、1名が「もっとしてほしかった」、1名が「その他」の1名は「活動中はいらない」と記載されていた（図3）。

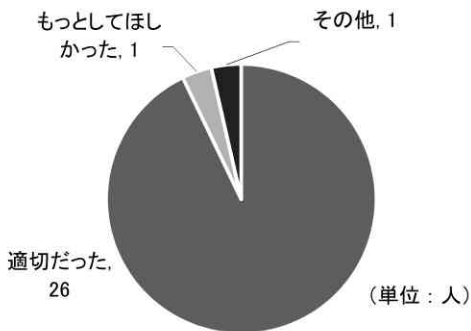


図3 スタッフの声かけやアドバイス

それぞれの保護者の様子を見ながら、声かけのタイミングや子どもへの触れ方などを助言したが、活動中にどこまで積極的に保護者へ介入するか、保護者それぞれの気持ちはどうか等、スタッフ間でも明確な方針は定めることはできず、その場の状況判断でやらざるをえなかつ

た。教室終了後のスタッフミーティングでどのように保護者に介入するかを話しあうことも多かったが、保護者からの評価は高かった。ふだんの保護者の様子（保育士の声かけの受けとめ方等）を知る保育士であるため、それぞれの保護者に応じた対応ができていたものとする。

(3)-2 スタッフによるプログラムの解説

毎回学習会前に、スタッフが当日のプログラムの目的と子どもの様子について解説をしたが、その解説については、21名が「よくわかった」、7名が「わかった」を選択した（図4）。

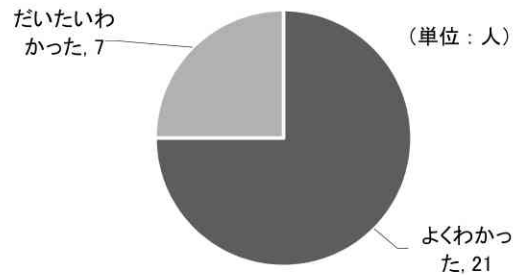


図4 プログラムの解説はわかりやすかったか

教室は親子が一緒に楽しく遊べる場であることが大事だが、子どもの発達特性や子どもへのかかわり方を理解していただくために、その遊びがプログラムに組み込まれている理由や当日の子どもの様子を解説し、理解の一助とした。保育士がふだんの保育での姿も述べながら当日の内容について解説したのが保護者にとってわかりやすい解説となっていたものと考えられる。

(3)-3 記録を書いて提出すること

教室終了後、保護者が教室での子どもの様子や家庭での様子、質問や感想を記載して翌週保育園に提出し、担当保育士がコメントを記入して返却した。記録を書くことについて複数選択で尋ねた。24名が「子どものことを考えるきっかけになった」、22名が「生活や遊びを見直すきっかけになった」、12名が「家庭内での対話にひろがりが出た」を選択した。1名が「記録を書くのが負担だった」、1名が「その他」として「学生時代の実習記録のようだった」と記述されていた。「記録することの意味がわからなかった」は選択されなかった（図5）。

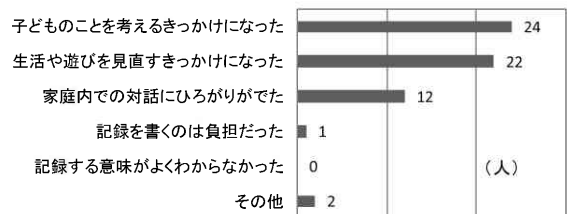


図5 記録を書いて提出すること(複数回答)

教室への参加に加え、家庭での課題を出すことについては、忙しい保護者にとっては負担であったかもしれないが、教室をふりかえることで保護者の体験や気づきを定着するために行った。提出された記録に対して、担当保育士がコメントを書いて返却する。保護者からの質問に丁寧に回答し、教室でうまくいった親子の場면을記載したり、通常保育での様子もからめて記載するなど、保護者へのアドバイスや保育園が考えていることなどを短いながらも盛り込んで保護者が育児に積極的になれる、次回の教室の参加意欲を高めるような書き方を工夫していったこともよい評価につながったと考える。コメントを書くのは担当保育士であるが、コメントの内容や書き方については必要に応じてスタッフミーティングで相談するなど、多角的な視点からコメントを工夫した。

(3)ー4 学習会のミニレクチャーについて

学習会が育児の参考になったかどうかは、24名が「とても参考になった」、3名が「多少参考になった」を選択し「あまり参考にならなかった」を選択した保護者はいなかった。「分類不能」は「とても参考になった」と「多少参考になった」の両方を選択したものである(図6)。

学習会のテーマは年度当初に立てるが、毎回の教室での親子の様子から、こちらが伝えたいことを計画的に伝えるより、保護者にとって必要な時期に必要な内容を提供していくことのほうが効果的であると判断し、年度当初に計画はするものの、テーマを入れ替えるなど柔軟に対応した。また専門職によるミニレクチャーとともに、担任保育士による保育園での子ども達の様子を写真やビデオを使いながら紹介し、保護者がより子どもの発達や実態を実感できるようにした。さらに保護者どうしが話し合う時間も確保した。学習会のテーマは毎年修正していった。

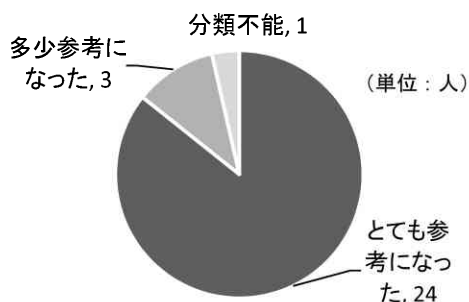


図6 学習会は参考になったか

(4) 参加したことによる変化について

(4)ー1 園での子どもの姿をイメージできたか

教室に参加することで、保育園でのわが子の姿がイメージできるようになったかという質問に対しては、10名が「かなりできた」、16名が「ある程度できた」、1名が

「あまりできない」を選択した。「分類不能」は「かなりできた」と「ある程度できた」の両方を選択したものである(図7)。

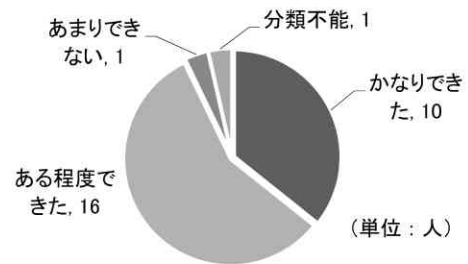


図7 園での子どもの姿をイメージすることができたか

「あまりできない」を選択したのは、6月生まれの1歳児クラス在籍児の保護者である。教室に参加した子どもは、2012年度は2～4歳児在籍児、2013、2014年度は1～3歳児と2、3年次は年齢を下げた。早期介入することの効果をおねらったものであるが、年齢が低いゆえに、集団における子どもの姿はイメージしにくかった可能性はある。

(4)ー2 家庭での遊びのレポーター

家庭での親子遊びのレポーターが増えたかについては、5名が「かなり増えた」、20名が「増えた」、2名が「あまり増えなかった」、1名が「わからない」を選択した(図8)。

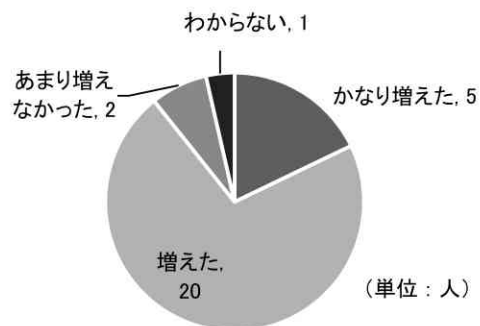


図8 家庭での遊びのレポーターは増えたか

手遊びや親子が身体を触れ合っている遊びは、日ごろ保育園で子どもたちがやっている遊びを教室のプログラムに組み込んだり、教室でやった手遊びを通常の保育で行うなど、何度もやることで子どもが遊びを覚えて楽しめるよう配慮した。そして、家庭で親子でできるように、教室では歌詞を提示したり、やり方を丁寧に伝えたり、子どもが園でどんなふう楽しんでいるのかを伝えることで、保護者が家庭で子どもと一緒に遊べるような支援をした。その結果、家庭での親子遊びのレポーターが増えたという保護者が多かったと考える。単にプログラムに遊びを組み込んで当日経験するだけでなく、家庭での生活につながるような援助を行った成果と考える。

(4)ー3 子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さ

子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さを感じられたかという質問では、24名が「強く感じた」、4名が「感じた」を選択し、「あまり実感がない」「わからない」を選択した保護者はいなかった(図9)。

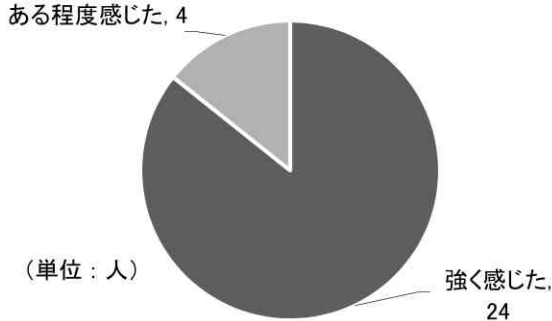


図9 子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さを感じたか

プログラムは、それぞれの子どもの苦手な遊び、できる遊び、保護者と一緒に楽しめる遊び等を組み合わせて設定した。それは、教室の目的として、保護者にわが子の得意な課題、苦手な課題の両面を理解していただくこととともに、育てにくさを感じている保護者には親子で一緒に遊ぶ楽しさを感じていただけるような遊びをプログラムに取り入れて、育児のモチベーションが高まる機会にしたいというねらいがあったからである。参加児それぞれの発達の気になる点は異なるが、毎回、それぞれの子どもが楽しめる活動をひとつは提供するという方針をとったことによって、保護者が子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さを実感されたものと考えられる。

(4)ー4 育児や子どもの見方の変化や気づき

「教室参加を通して、ご自身およびご家族の子育てや子どもの見方に変化や気づきがあれば書いてください。」と自由記述欄を設けたところ、全員がなんらかの記載をされていた。

記述内容からは、①子どもの発達や特性について理解がすすんだこと、②子どもに対する具体的ななかかわり方を知ったこと、また実践するようになったこと、③育児に対する保護者自身の考え方が変わったこと、④家族への影響があったこと等、様々な気づきが記載された(表2は自由記述からの抜粋)。

①子どもの発達や特性への気づきや理解は、教室のプログラムやきりかえ場面での子どもの様子を実際に見ることや、学習会での発達や生活に関するレクチャー、保護者どうしの情報交換等により理解がすすんだと考えられる。教室参加中または参加後に、医療機関へ受診した子どもは23名中9名あった。受診することが目的の教室ではないが、教室でのわが子の理解がすすんだことが、受診につながっている。医療機関を受診すること、療育を利用することが子どもや保護者自身の育児にどうい

メリットがあるのかということを経験していかなくで自ら気づかれたり、スタッフに相談されたりして受診を前向きにとらえられていた。

②子どもに対する具体的ななかかわり方は、教室でスタッフが子どもにどのような声かけをしたり身体に触れたりしているかを実際に見ることや、スタッフによる助言が有効だったと考える。また学習会でどのようにかわるのがよいのかを専門職がそれぞれの専門の立場から解説したことも、体験を知識として獲得していく一助になったものと考えられる。

③育児に対する考え方の変化として、子どもに向き合うことの重要性に気づいたり、保護者自身が気持ちにゆとりを持つことの必要性、自分自身の成長、園との関係等があげられている。日頃生活に追われて子どもと向き合う時間がない保護者にとって、親子教室が子どもとじっくり向き合うことのできる時間となったことで、自らの子育てをふりかえる機会になったと考えられる。また保護者が感じている子どもの育てにくさや不安に対して、専門職も含めたスタッフが個々に相談にのり、一緒に子どもの育ちについて考え、保護者の気持ちに寄り添う支援をしたことも、子育ては母親ひとりで考え込まず気持ちにゆとりを持たせようというメッセージとして伝わったものと考えられる。保育園との関係については、継続的な教室への参加によりスタッフ保育士との信頼関係が深まったものと考えられる。保育園は、教室が行われている土曜日だけでなく、通常保育も行っているため、日々の送迎やクラス懇談、個人懇談、園行事など、保育士と話をする機会が多々ある。教室でのことを、送迎時や懇談で話をするなかで、保育園スタッフとの関係は深まっていったものと考えられる。

④家族への影響については、主に父親について言及されているが、父親自身の変化とともに、教室参加が家庭内での会話につながっていた。教室開始時は父親の参加をそれほど予想していなかったが、たまたま第2子を妊娠中の母親が複数いて、子どもと一緒に動けないかわりに参加した父親が参加されたのが、夫婦で子どものことを考える機会になった家族もあった。

表2

①子どもの発達や特性についての気づきや理解
・事前に伝えてイメージさせることが大事とわかった。
・静かにしていることが少ないと思っていたが、何が得意で何が苦手なのかを理解できた。
・なぜしないのかではなく、難しくできないのかなど見方を変えられるようになった。
・姉と違うということを理解して比べなくなった。
・なんでうちの子はしないのだろうと悩んでいたが、しなくてもいろいろ考えてるんだと無理をさせずに様子を見るようになった。
・園で子どもがどのように過ごしているのか少しわかつ

た。
②子どもに対する具体的ななかかわり方
<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの幅が広がり手遊びなど家でもできてよい。 ・活動の間の座って待とうねといった声かけ、手本をみせるようになった。 ・とにかくほめるようになった。 ・すごく不安そうな時「大丈夫」と声をかけ続ける。 ・日常生活のしなくてはいけないことも遊びとリンクさせてゲームのように楽しめるようになった。 ・教室参加前、ことばだけの指示だったが、最近は手本を見せたり人形を使って見せる指示を考えるようになった。 ・今まではダメとしか言えなかったが、～だからだめなんだよと言えるようになった。 ・助言どおり言葉を広げて会話するようにしている。結構会話が続くようになってきた。 ・先生方のようにわかりやすい言葉で話せるよう努力している。 ・自分の指示、伝え方がわかりやすいかどうか、いつてから考えるようになった ・ちょっとしたことで子どもの気分をかえられることがわかったので、余裕のあるときは今ぐずっているのをやめさせられる方法がないか考えるようになった。 ・子どもと話す機会が増えた。 ・親が落ち着きあせらないよう見守るようにした。 ・平日はゆっくりかかわれないが、少しでもかかわる時間をもうけようとするようになった。 ・大人の都合ではなく子どもに合わせた対応を心がけるようになった。子どもの気落ちを重視するようになった。 ・無駄に泣かせないですむすばらしいヒントが毎回のように出てきた。 ・先生方子どもへの接し方など勉強になる点が多かった。
③育児に対する考え方
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと向きあう大切さを再認識できた。 ・教室の間は1対1で接することができてよかった。 ・普段ゆっくり向き合い遊ぶ時間がもてないので教室の時間だけは子ども思い切り遊ぼうと決めて、自分も楽しんで遊べたのがよかった。 ・子どもと一緒に生活を楽しもうと考え方を考えることができた。 ・絵本を読むことをしてあげていないなどいろいろ気づいた。 ・人と比べるより本人の楽しい姿を余裕をもって見守ることが大切なんだと思った。 ・自分にも余裕が必要だと気づいた。 ・自分がストレスを感じていることは、子どももストレスを感じているんだなと気づくことができた。

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもだからと思わず、ひとりの人間としてしっかり向き合おうとするようになった。そうすることで子どももこっちにしっかり発信したり返信したりすることがわかった。 ・子どもに対してどうしたの？と余裕を持てるようになった。 ・子どもにこうあってほしいという気持ちが少なくなった。こういうときはこうなるんだなというありのままの姿を一度うけとめ、そのうえでどうしていくといいかと考えるようになった。気持ちの余裕が自分に増えたのが一番の変化である。 ・子どもが甘え上手になり、それを大きくうけいられるようになった自分も成長したかなと思う。 ・子どもの個性を大事にしながらのびのび成長していけるように、親のできることをいろいろ工夫してやっていきたいと教室参加をきっかけにより考えるようになった。 ・子どもの表情や行動が目に見えて変わってくるので、自分でも楽しく子育てできるようになったと思う。 ・少しの工夫や少しの時間でも集中して一緒に遊んだり本気で楽しむことで親子の絆が増えたと思う。 ・泣きわめくことを愛情不足といわれ、不快で情けなかったが、わが子の特性がわかり、自己嫌悪が軽減した。 ・園での様子がよくわかり、園と家庭で一緒に育てていると実感できるようになった。何でも相談できる場として信頼することができた。
④家族への影響
<ul style="list-style-type: none"> ・数回参加した父親が、ほめるのが効果的というのがよくわかる場面があったと話していた。 ・教室で教えてもらったことを家族に伝え、一緒に考えることが増えた。 ・父親と子どものことで会話することが増えた。 ・父親が入浴時に子どもと手遊びをしている声が聞こえ実践してくれているようでうれしい。 ・父親も参加していたので積極的に子どもと身体を使って遊ぶようになった。

5. 育児支援の視点からみた在籍園における親子療育教室

(1)「発達の気になる子ども」の保護者への育児支援

本研究における「発達の気になる子ども」の保護者への「育児支援」として期待したことはいくつかある。

ひとつは子どもの発達特性の理解であり、その理解に基づいた適切ななかかわり方（育児）を知って実践できるようになること、育ちの見通しを持つことである。そして、育てにくさを感じつつも育児のモチベーションを下げることなく、子どもの育ちを見守る楽しさ、かかわる楽しさを感じていただくことである。

発達特性を理解するには、家庭のみならず集団生活での子どもの姿を知ることが必要である。通常保育で子ど

もをよく知る保育士が親子教室のスタッフとしてプログラムを企画運営していくことは、保護者に伝えたい子どもの姿が見えるような活動を取り入れることが可能であった。さらに幼児期の発達の道筋や望ましい生活習慣等について学習会という形で理論的に学んだり、保護者どうしの情報交換等をしたり、保護者自身が記録をつけて体験や学びを定着していく方法をとったことが、保護者の子ども理解につながったものと考えられる。

子どもへのかかわり方は、子どもの発達特性に応じた対応方法を保育士が教室でやって見せ、保護者へ促したり声かけをし、なぜそのようなかかわり方をするのかという解説を加えていくなかで、保護者が具体的なかかわりかたを見出されていかれたのであろう。

育児のモチベーションを維持するには、保護者自身が子どもとかかわることが楽しいと感じる経験や、子どもがとまどっているときに手助けをしてそれがうまくいったときに親としての有能感を感じるなどを積み重ねることが必要であろう。親子教室では、子どもの気になる姿に気づいていただけるような活動とともに、親子で遊ぶ楽しさを実感できる遊びを組み込むことで、子どもが楽しむ姿を保護者が見る、保護者と一緒に遊ぶ子どもの笑顔を保護者が感じられる場面ができるようにした。また対応がうまくいったときや、その時はうまく解決できなくても子どもへのかかわり方が適切な場合には「上手になさっている」「そのやり方でいい」といった声かけや記録のコメントとして伝える等、保護者の有能感が高まるように援助した。

(2) 在籍保育園での実施の有用性

子どもが在籍する保育園で保育士が主体となって行う親子教室は、親子にとって通いなれた場所であり、ともに活動するのは、知っている先生、毎日一緒に生活している友達、保護者どうしである。このことは教室に参加することの不安や緊張感を軽減するし、保護者どうしの情報交換も初回からスムーズであった。本論文で詳細は述べないが、初年度の親子療育教室参加者は、OB会として園スタッフの援助を受けながら保護者主体の勉強会や遊びを企画し、就学に向けての情報収集や準備等をされている。同じ小学校へすすむのでより具体的な情報交換になり、保育園としても就学先小学校への移行支援の方法などを保護者に伝える場となっている。親子療育教室をきっかけに継続する育児支援のシステムができつつある。

親子教室では保護者と保育士が子どもの様子を一緒に見て、一緒によりよいかかわり方を模索しながら、学習会で幼児期の発達や生活について学びを共有する。親子教室での遊びを通常の保育で展開して、その様子を日々の送迎時や懇談で担任が保護者へ伝え、逆に家庭での様子を親子教室での姿に照らし合わせながら保護者が担任に伝える。親子教室の存在が家庭と園の関係をさらに深

めるという相乗効果をもたらしている。

今回参加された保護者全員に、子どもの発達特性を十分理解していただけたかというそうではなく、不十分なまま終了したケースもある。ただ、在籍園であるので、親子教室が終了したあともひき続き通常保育のなかで子どもの発達支援が可能であり、子どもの発達状況を保護者に伝え、保護者の気持ちを受けとめながら育児支援を継続することは可能であると考えられる。

5. 結語

在籍園で園保育士が主体となって行う親子療育教室は、保護者への育児支援の場として有用であることがあきらかとなった。

保護者への育児支援は、特に子どもに発達特性がある場合、乳幼児期に行えば後は大丈夫というものではなくずっと継続されることが必要である。乳幼児期の支援は、生涯にわたる支援のスタートであり、そのスタート時期にわが子の発達特性を理解し、育児支援をうまく利用しながら子どもへのかかわりかたを知り実践することを成功体験として経験することが大切であろう。

今後、親子療育教室をより効果的な育児支援の場とするためには、保育士の力量（子どもの発達評価力、保育実践力、保護者支援力等）を高めていくことが必要である。親子療育教室の企画運営そのものが保育士の質の向上の場として有効であることが我々の実践において示唆されており⁷⁻⁹⁾、その効果的な方法について今後検討していく予定である。

さらに、本親子教室の連携機関、親子の受診機関のひとつである県こども療育センターによる教室への支援や同センターでの保育士研修など、専門機関との連携を今まで以上に充実させ、システムとして構築していくことが今後の課題である。

本稿の要旨は、平成27年5月第68回日本保育学会（名古屋）において発表した。

引用文献

- 1) 佐田久真貴 保健センターにおける親子教室の有効性について—最前線で母子保健活動を担う保健師と臨床心理士の連携— 小児の精神と神経 2010 ; 50 (3) ; 303-314
- 2) 田丸尚美 親子教室における親子・家族関係の変化～1歳半健診以後の発達支援事例を通して～ 福山市立女子短期大学紀要 2011 ; 38 ; 51-56
- 3) 辻貴文、田畑 治、地域療育教室における発達障害児への早期支援に関する一考察 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号 2006 ; 27-40
- 4) 保育所保育指針 厚生労働省告示 第141号 2008.3.

- 5) 保育所保育指針等の施行等について 厚生労働省
雇児発第0328001号 2008. 3.
- 6) 福井市の保育所における質の向上のためのアクションプログラム 福祉福祉保健部保育課 2011. 10.
- 7) 保育所における親子療育教室中間報告書 2014. 4.
- 8) 竹内恵子、橋本かほる、玉節子他 在籍保育園における親子療育教室の有用性について 福井大学教育地域科学部紀要 2014 ; 4 ; 269-286
- 9) 保育所における親子療育教室最終報告書 2015. 5.

Effectiveness of the class for parents and children at nursery school

Keiko TAKEUCHI, Eri MORIO, Youko TAKINAMI, Kiyomi HASEGAWA, Kahoru HASHIMOTO, Akemi TSUDA

Keywords: Parents-Children class, nursery school, developmental disorders, nursery teacher, parents,